

第2節 出土木製品について

西木流C遺跡では、1号流路跡からは土器の他に多くの木製品が出土した。その内容は農耕具・食膳具・祭祀具などのほか、杭や建築部材と推定されるものも見られるなど多岐にわたっている。その中にはこれまで会津地方では出土例が見られなかった木製品、類例が少ない木製品をいくつか確認することができた。木製品の中には遺跡の性格を考える上でも重要なものもあるため、類例の少ない木製品を中心に出土木製品についてまとめておきたい。

図38-6はコロバシである。コロバシは東北地方では岩手県奥州市落合II遺跡、宮城県仙台市中在家南遺跡について3例目である。全国的に見ても、石川県中能登町水白モンショ遺跡、富山県小矢部市五社遺跡、長野県更埴市社宮司遺跡、群馬県伊勢崎市大道西遺跡など、西木流C遺跡を含め7遺跡7例しか確認できない。コロバシ以外にもコロガシなどとも呼ばれる。発掘調査で確認された事例の多くが平安時代から中世の遺跡で出土しており、現状ではそれ以前の時期に遺跡から出土した事例は確認できない。用途は代掻きに使用されたと考えられている。

コロバシは特徴によって2つに区分することができる。A類は両端に軸状の突起を持つもの、B類は軸状の突起を持たないが、両端に孔があけられているものである。西木流C遺跡出土例は両端に孔があけられているB類に該当する。A類は落合II遺跡、中在家南遺跡、水白モンショ遺跡、五社遺跡、B類は大道西遺跡、西木流C遺跡の例が該当する。社宮司遺跡出土のものは欠損が大きいため不明である。A類では軸状の突起に縄などを固定して使用し、B類では木製あるいは金属製などの軸を穴に挿し込み使用していたと考えられる。コロバシの使用方法は津軽藩士比良野貞彦が天明年間(1781~1788)に記した『奥民図彙』に見られ、そこでは「マルヒキ」と呼ばれ、軸に紐を結び付け人力で引いている。

西木流C遺跡においてコロバシが出土した流路跡のℓ3から底面にかけては多くの土器も出土しているが、その年代は9世紀後半~10世紀前半にかけてのものである。コロバシは土器が多く出土した面よりも層位的には上で出土しており、遺跡の主要機能時期の遺物としては認識できない。コロバシの放射性炭素年代測定の結果は11世紀前半~12世紀前半と出ており、最終形成年輪が残っていないことからその年代よりは新しくなる可能性がある。9世紀後半~10世紀前半以降に、流路跡にある程度土が堆積した時期に廃棄あるいは流れてきたものと考えられる。

図35-1は脚と考えられる木製品である。脚と見られる木製品は矢玉遺跡から2点出土しており、1点が台脚、もう1点は机の脚と報告されている。それらは脚自体に木材を差し込む穴が確認できる点で図35-1とは異なる。図35-1はその上部に天板が組み合わさることが想定でき、机や台などの脚部である可能性が高い。

図34-9は紡織具の可能性が考えられる。類例は大阪府豊中遺跡、徳島県観音寺遺跡などで出土例が見受けられる。これらの製品は東村純子氏によって紡織具の一種である整経籠であると指摘

されている(東村2011)。神奈川県小田原市下曾我遺跡からも類似した特徴を持つ木製品が出土している。報告中では用途不明とされているが、類例として大阪府豊中出土の木製品が挙げられている(谷口2002)。また、この製品は『考古資料大観』では儀礼用具として掲載されている。下曾我遺跡からは出土品中には紡織具の「たたり」と推定される部材が出土しているが、たたりとするには柱の部分が見られず確定的ではない。神奈川県逗子市池子遺跡群No 1 - A東地点の旧河道跡からも類似した木製品が出土している。この旧河道跡からは紡織具が出土しており、同じ溝から紡織具が出土しているということを考えると、この木製品も紡織具の整経籠である可能性も考えられる。図34-9はこれらの類例に近い特徴を持つ製品である。他に紡織具と考えられる木製品は出土していないが類例から整経籠であると考えておきたい。

図35-6は箱として報告した木製品であるが、折敷である可能性も考えられる。折敷は近隣の遺跡では矢玉遺跡から出土している。折敷以外で類似する特徴を持つものとしては、根岸遺跡出土の絵馬とされている木製品、新潟県糸魚川市山岸遺跡出土のまな板とされる木製品がある。根岸遺跡のものには絵は描かれていないが、絵が描かれたものに類似する特徴を持つことから絵馬と推定されたもので、根岸遺跡のものは線状の痕跡が多く残されている点からまな板と認識されたものと考えられる。図35-6には絵が描かれておらず、線状の痕跡も確認できない。

流路跡からは斎串と考えられる木製品が13点出土している。明確に祭祀遺物といえるのは斎串のみである。図34-10も斎串の一種である可能性が考えられる。福島県の遺跡で斎串が多く出土している遺跡としてはいわき市荒田目条里遺跡が挙げられる。西木流C遺跡と同じように古墳時代から古代にかけての河川跡が調査された遺跡であり、多くの木製品が出土している。その中には斎串と見られる木製品も存在し、西木流C遺跡出土のものと類似する特徴を持つものも確認できる。この遺跡は木製品が多く出土した点以外にも、郡衙と推定される遺跡の近隣に所在するという点で西木流C遺跡と同じような特徴を持った遺跡といえる。西木流C遺跡では会津若松市の調査で廂を持つ掘立柱建物跡が確認されており、郡衙との関連が想定されるが、斎串が出土したことからすると、西木流C遺跡周辺で祭祀が行われていた可能性も考えられる。遺跡の性格を考える上で重要な遺物である。

木製品の年代については製品自体から年代を考えることができる資料が少ない。コロバシ以外の木製品は流路跡のℓ3から出土している。この層から出土した土器の年代は9世紀後半～10世紀前半におさまると考えられることから、その年代が流路跡の主要な機能時期と推定でき、木製品も多くが同様の年代幅におさまるものと考えられる。

また、付編1の放射性炭素年代測定でコロバシ(図38-6)、皿2点(図29-1・2)、田下駄(図35-10)の4点について放射性炭素年代測定を実施した結果、それぞれ、11世紀前半～12世紀中頃、8世紀後半～10世紀中頃、7世紀後半～8世紀後半、7世紀後半～9世紀後半の測定結果が出ている。これらの測定結果については、土器から推定した1号流路跡が機能した年代(9世紀中頃～10世紀前半)と矛盾するものではないと思われる。

(鶴 見)